

# 看護学生の援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連 —臨地実習前後の比較—

## The Relationship between Helping Norm and Vocational Identity: Comparison of before and after Clinical Practice

柴田 和恵<sup>1)</sup>

Kazue SHIBATA

高橋 ゆかり<sup>2)</sup>

Yukari TAKAHASHI

鹿村 眞理子<sup>3)</sup>

Mariko SHIKAMURA

The purpose of this study is to search for the relationship between helping norm and vocational identity of nursing students before and after clinical practice. It was targeted at 76 nursing junior college third graders. A survey was conducted with an anonymous self-report questionnaire using two scales (helping norm scale: Hakoi & Takagi 1987, vocational identity scale: Fujii et al.2002). Data were analyzed by using U test and multiple regression analysis. Helping norm don't showed significant differences between before and after clinical practice. But, vocational identity was established so that "norm of self-sacrifice" was high, and a factor to prescribe increased "norm of restitution" after clinical practice, and the tendency became strong.

Key words: helping norm (援助規範意識)  
vocational identity (職業的アイデンティティ)  
nursing students (看護学生)  
clinical practice (臨地実習)

1) 天使大学 看護栄養学部 看護学科

(2007年1月22日受稿、2007年3月26日審査終了受理)

2) 高崎健康福祉大学 看護学部 看護学科

3) 獨協医科大学 看護学部 看護学科

## I. はじめに

看護は、人間関係を基盤とした人への援助活動あるいはケア提供活動であると考えられる。箱井・高木<sup>1)</sup>によると、「我々は、援助を必要とする場面に遭遇した時、援助に関係する規範の影響を受けて、愛他的に行動する。また、このような規範を社会化の過程で学習し、各自の行動基準として内在化している」というが、看護すなわち援助を専門職とする看護職を志す看護学生は、どのような援助規範意識の特徴があるのだろうか。

一方、Mayeroff<sup>2)</sup>は、「ケアの提供においては、自らのアイデンティティを保ちながら、他者の価値観を認めていくことが求められる」と述べている。このように、個人のアイデンティティ形成の一側面である職業的アイデンティティの獲得がよりよいケアを行ううえでも重要と考える。また Erikson<sup>3)</sup>は、「職業的アイデンティティとは、職業集団のもつ規範や価値体系との相互作用の中で自覚される主観的な感覚である」と述べており、これを獲得していく過程には、様々な体験が深く関わっているとも推察される。看護学生にとっては、様々な体験をする機会がすなわち臨地実習(以降実習という)ということになる。岩田<sup>4)</sup>は、「臨地実習での経験は、内面的成長を促すことを期待されるとともに、職業的アイデンティティの形成にもつながる重要な職業的社会化の機会となる」とも述べている。これらのことから、看護学生の援助規範意識と職業的アイデンティティは、各々に影響し合っていると同時に、実習体験を通して影響を受けることが予測される。それらを明らかにすることは、看護基礎教育における効果的実習指導への基礎的資料となり、意義があるものと考えられる。

これまで、看護学生の職業的アイデンティティについては、尺度開発やその特徴や要因分析など多数研究報告されており<sup>5-7)</sup>、援助規範意識に関しても、心理的特徴との関連等が報告されている<sup>8-9)</sup>。しかしながら、実習前後の特徴を踏まえ、看護学生の援助規範意識の特徴や職業的アイデンティティとの関連などを報告しているものは見当たらない。

そこで今回は、実習前後における看護学生の援助規範意識と職業的アイデンティティの特徴、な

らびにそれらの関連について明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

A看護系短期大学3年生76名を対象として、実習前73名(女性60名、男性13名)、実習後55名(女性48名、男性7名)の有効回答が得られた。

### 2. 調査時期・方法・内容

調査時期は、3年次の実習開始直前の2005年4月下旬および実習終了直後の11月の2回に分けて自記式質問紙調査を実施した。調査に用いた測定尺度を以下に示す。

#### 1) 援助規範意識

援助規範意識の測定には、箱井・高木<sup>10)</sup>によって作成され、信頼性・妥当性の検証されている援助規範意識尺度を用いた。本尺度は、他者を援助することに関する規範意識を測定するための29項目からなる尺度で、「返済規範意識」「自己犠牲規範意識」「交換規範意識」「弱者救済規範意識」の4因子で構成されている。「返済規範意識」は、他者の援助や好意に対して報いるべきであるといった規範意識で、「自己犠牲規範意識」は、自分のことは後回しにしても他者を助けるべきであるといった規範意識である。「交換規範意識」は、援助に見返りを期待し、自分に有利になるような援助なら行うべきであるといった規範意識で、「弱者救済規範意識」は、自分より弱い立場の人が困っているなら助けるべきであるといった規範意識である。評価は、5件法で、得点が高いほどその特徴を示している。

#### 2) 職業的アイデンティティ

職業的アイデンティティの測定には、藤井他<sup>11)</sup>によって医療系学生用に作成された20項目からなる尺度で、主語の部分看護学科用の表現にしたものを用いた。本尺度は、「看護職の選択と成長への自信」「看護職観の確立」「看護職として必要とされることへの自負」「社会への貢献の志向」の4因子で構成されている。「看護職の選択と成長への自信」は、看護職を選択した事への確信や、看護職に対する自己一致した感覚を示すもので、「看護職観の確立」は、看護のあり方について自分自身の考えや価値観をもつことを表している。また、「看護職として必要とされることへの自負」

表 1. 実習前後の各尺度得点の特徴

	実習前		実習後		U検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
援助規範意識					
返済規範意識	3.50	0.48	3.36	0.40	
自己犠牲規範意識	3.52	0.51	3.49	0.42	
交換規範意識	3.19	0.53	3.20	0.47	
弱者救済規範意識	3.58	0.35	3.56	0.35	
職業的アイデンティティ					
看護職の選択と成長への自信	4.82	1.12	5.10	0.91	
看護職観の確立	4.59	1.09	5.11	1.05	**
看護職として必要とされることへの自負	4.51	0.81	4.79	0.79	*
社会への貢献の志向	5.53	0.88	5.64	0.82	

\*\* : p<.01 \* : p<.05

は、看護職としての自分が医療現場で必要とされていることへの自負心を表すもので、「社会への貢献の志向」は、将来へ向かって看護職として患者の願いに応え、社会貢献していきたいという志向性を示している。評定は、7件法で、得点が高いほどその特徴を示している。

### 3. 分析方法

各尺度の下位因子得点は、因子の素点合計を項目数で割り、単純集計した。また、実習前後の比較には、U検定を行った。さらに、援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連は、ピアソンの積率相関係数および重回帰分析を行った。統計処理には、SPSS 11.5J for Windows を用いた。

### 4. 倫理的配慮

調査用紙の配布にあたり、対象者には文書と口頭で調査の目的と調査の協力は自由意志であること、回答は無記名とした。また、質問紙への回答をもって同意とした。なお、本調査研究は、A看護系短期大学研究倫理委員会の審査を経て行われた。

### 5. 用語の定義

規範意識：多くの人々が共有している法的拘束力のない感覚（一般的に「道徳」とか「常識」と呼ばれるもの）のうち、人助けに対する共有感覚

援助規範意識：他者を援助することに関する規範意識

職業的アイデンティティ：社会的現実や自分の能力や適性を踏まえたうえで、自分に向

いた職業を選びつつあるという感覚

### 6. 実習の概要

3年生は5月～11月の期間に成人看護学（急性期・慢性期）、母性看護学、小児看護学、精神看護学、老年看護学、地域看護学の各領域、数日～3週間にわたり実習を行っている。

## III. 結果

### 1. 実習前後の各尺度得点の特徴

実習前後の援助規範意識尺度と職業的アイデンティティ尺度の下位因子得点およびU検定の結果を表1に示した。

援助規範意識尺度の下位因子得点は、実習前後でその順位に変化はなかった。最も得点が高かったのは、「弱者救済規範意識」（前3.58,後3.56）、次いで「自己犠牲規範意識」（前3.52,後3.49）、「返済規範意識」（前3.50,後3.36）、「交換規範意識」（前3.19,後3.20）の順であった。

職業的アイデンティティ尺度の下位因子得点は、実習前では、「社会への貢献の志向」（5.53）が最も得点が高く、次いで、「看護職の選択と成長への自信」（4.82）、「看護職観の確立」（4.59）、「看護職として必要とされることへの自負」（4.51）の順であった。実習後は、「社会への貢献の志向」（5.64）が、実習前同様に最高得点を示した。しかし、実習前と異なり、「看護職観の確立」（5.11）と「看護職の選択と成長への自信」（5.10）の順位が入れ替わり、「看護職として必要とされること

表2. 実習前後の援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連

	看護職の選択と成長への自信	看護職観の確立	看護職として必要とされることへの自負	社会への貢献の意向
実習前				
返済規範意識	0.19	-0.07	-0.03	0.13
自己犠牲規範意識	0.38 **	0.29 *	0.10	0.45 ***
交換規範意識	0.23	0.11	0.00	0.18
弱者救済規範意識	0.19	-0.14	0.01	0.24 *
実習後				
返済規範意識	0.45 **	0.40 **	0.38 **	0.40 **
自己犠牲規範意識	0.40 **	0.47 ***	0.32 *	0.59 ***
交換規範意識	0.12	0.12	0.06	0.19
弱者救済規範意識	0.13	0.07	-0.01	0.19

\* : p<.05 \*\* : p<.01 \*\*\* : p<.001

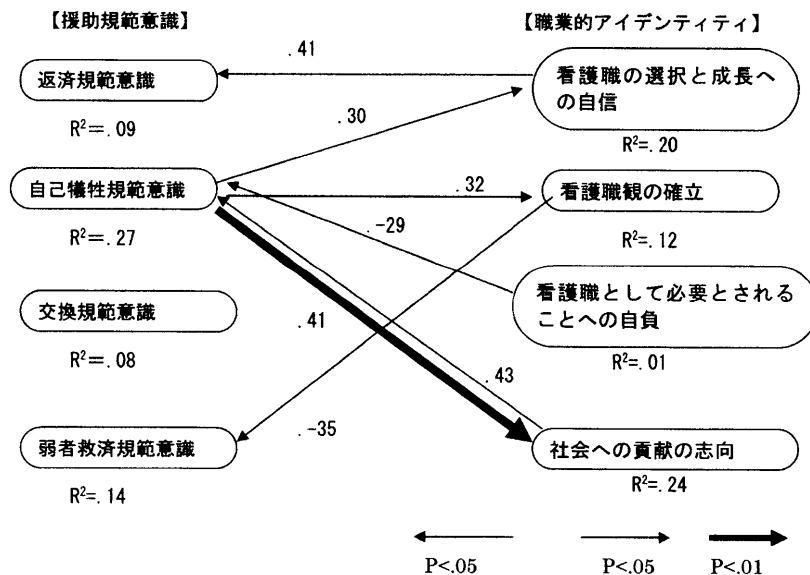


図1. 援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連 (実習前)

への自負」(4.79)の順であった。

実習前後比較では、援助規範意識に有意差は認められなかったが、職業的アイデンティティにおいては、「看護職観の確立」(p<.01)と「看護職として必要とされることへの自負」(p<.05)が有意に実習後高得点を示していた。

## 2. 援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連

### 1) 実習前の特徴

表2に示すように、援助規範意識の下位因子「自己犠牲規範意識」は、職業的アイデンティティの下位因子「看護職の選択と成長への自信」(r=.

38,p<.01)、「看護職観の確立」(r=.29,p<.05)、「社会への貢献の志向」(r=.45,p<.001)と正の相関を認めた。また、援助規範意識の下位因子「弱者救済規範意識」は、職業的アイデンティティの下位因子「社会への貢献の志向」(r=.24,p<.05)と正の相関を認めた。

次に、図1に示すように、援助規範意識尺度の下位因子を独立変数に、職業的アイデンティティ尺度の下位因子を従属変数にした重回帰分析を行った。その結果、「自己犠牲規範意識」と、「看護職の選択と成長への自信」(β=.30,p<.01)、「看護職観の確立」(β=.32,p<.05)、「社会への貢献の志向」(β=.41,p<.01)との間で正の影響が認め

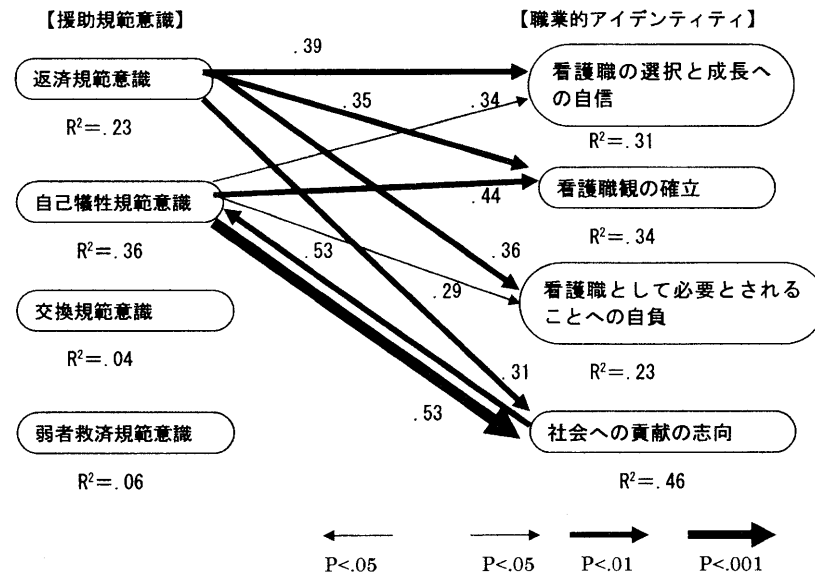


図2. 援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連 (実習後)

られた。

一方、職業的アイデンティティ尺度の下位因子を独立変数に、援助規範意識尺度の下位因子を従属変数にした重回帰分析を行った結果では、「看護職の選択と成長への自信」と、「返済規範意識」( $\beta = .41, p < .05$ )との間と、「社会への貢献の志向」と、「自己犠牲規範意識」( $\beta = .43, p < .05$ )との間で正の影響が認められた。また、「自己犠牲規範意識」と「社会への貢献の志向」においては、相互に影響を及ぼしあっていることがわかった。さらに、「看護職観の確立」と、「弱者救済規範意識」( $\beta = -.35, p < .05$ )との間と、「看護職として必要とされることへの自負」と、「自己犠牲規範意識」( $\beta = -.29, p < .05$ )との間に負の影響が認められた。

## 2) 実習後の特徴

表2に示すように、援助規範意識の下位因子「返済規範意識」と「自己犠牲規範意識」は、共にその強さは異なるが職業的アイデンティティの下位因子すべてと正の相関を認めた。

次に、図2に示すように、援助規範意識尺度の下位因子を独立変数に、職業的アイデンティティ尺度の下位因子を従属変数にした重回帰分析を行った。その結果、「自己犠牲規範意識」と「返済規範意識」とは、共に「看護職の選択と成長への自信」( $\beta = .39, p < .01$ )( $\beta = .34, p < .05$ )、「看護職観の確立」( $\beta = .35, p < .01$ )( $\beta = .44, p < .01$ )、「看護職として必要とされることへの自負」( $\beta = .36, p < .01$ )( $\beta = .29, p < .05$ )、「社会への貢献の志向」

( $\beta = .31, p < .01$ )( $\beta = .53, p < .001$ )との間で正の影響が認められた。なお、「弱者救済規範意識」と「交換規範意識」は、職業的アイデンティティとの間で影響は認められなかった。

一方、職業的アイデンティティ尺度の下位因子を独立変数に、援助規範意識尺度の下位因子を従属変数にした重回帰分析を行った結果では、「社会への貢献の志向」と、「自己犠牲規範意識」( $\beta = .53, p < .01$ )との間で正の影響がみられ、「社会への貢献の志向」と「自己犠牲規範意識」は、相互に影響を与えあっていた。

## IV. 考察

### 1. 実習前後の各尺度得点の特徴

援助規範意識尺度の下位因子得点順位は、実習前後で変化はなく、因子平均値が高かった順に「弱者救済規範意識」、「自己犠牲規範意識」、「返済規範意識」、「交換規範意識」であった。「弱者救済規範意識」とは、社会的に弱い立場や身体的に弱い人々を、自分の事を省みず援助するという意識が反映された規範<sup>12)</sup>で、今回の対象はその傾向が特徴的であったことが示唆された。また、一般に若年者世代では、「交換規範意識」が高く支持されている<sup>13)</sup>が、今回その傾向は少なく、援助を交換可能な対象ではなく、GIVE AND TAKEと割り切って捉えられず、自分に有利かどうかで援助を行うべきでない、援助に見返りを期待すべきでないという意識が強い傾向が伺える。

職業的アイデンティティ尺度の下位因子得点順位は、得点が高い順に「社会への貢献の志向」、「看護職の選択と成長への自信」、「看護職観の確立」、「看護職として必要とされることへの自負」であった。これは、医療系(看護・放射線・作業療法・理学療法学科)の学生を対象に行った調査<sup>14)</sup>と同様の結果を示しており、社会貢献の志向が看護学生の職業的アイデンティティの基礎として重要であることが再確認された。また、「看護職として必要とされることへの自負」は、最も得点が低く、教員や臨床指導者の指導の下での実習体験だけでは、学生自身、自分が看護師として医療現場で必要とされる存在であるのか確信を持っていない状況にいたことが推察される。

一方、実習前後を比較すると、援助規範意識は、ボランティア活動などの援助経験と有意に関連しており、当該の援助行動の特徴に対応した規範意識との関連がいっそう緊密である<sup>15)</sup>と報告されているが、今回実習前後で、援助規範意識の有意な得点差は認められなかった。これは、実習での援助経験の増加が、単に4つの援助規範意識の向上に結びつくわけではなく、実習での援助経験を通して援助の意味やあり方を深く考えることとなり援助規範意識の複雑化が生じ、それが結果に反映されていたとも推察される。これは、学年が進むほど援助規範意識が低くなる傾向がある<sup>16)</sup>こととも解釈が一致する。また、職業的アイデンティティの「看護職観の確立」と「看護職として必要とされることへの自負」が、実習後有意に上昇していた。杉森<sup>17)</sup>が、臨地実習は、一般社会における看護の価値づけを再吟味して、専門職としての看護を再評価し、価値づけるきっかけになると述べているように、実習経験が、職業的アイデンティティを高めるきっかけとなっていたと推察される。

## 2. 援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連

### 1) 実習前

援助規範意識が、職業的アイデンティティに及ぼす影響をみてみると、「自己犠牲規範意識」が高いほど、「看護職の選択と成長への自信」や「看護職観の確立」、「社会への貢献の志向」という職業的アイデンティティを確立していた。中でも「社会への貢献の志向」を強く確立していた。「自己犠牲規範意識」は、自分のことは後回しに

し、自己を犠牲にしてでも他者を援助しようという愛他心に関する意識が含まれており<sup>18)</sup>、他の規範意識に比べ、年代や性別に関わらず我々が広く平均的に意識している規範<sup>19)</sup>であることに加え、看護に携わるものに共通する規範的意識とも考えられ、その意識が強いほど看護職としての職業的アイデンティティが確立していったことは、納得できる。

次に、職業的アイデンティティが、援助規範意識に与える影響をみてみると、看護についての科目授業を修得し、実習を目前にした時期に、「看護職の選択と成長への自信」を強くもつほど、受けた援助や好意に対して、援助や好意で報いようとする互恵的規範意識等を強める傾向が伺えた。また、医学系学生の職業的同一性の基礎と考えられている「社会への貢献の志向」<sup>20)</sup>が強いほど、自己犠牲を含む愛他的行動をとる傾向が強いことが示唆された。一方、「看護職として必要とされることへの自負」や「看護職観の確立」が高いほど、「自己犠牲規範意識」や「弱者救済規範意識」が低くなっていた。このように職業的アイデンティティの確立に伴い、援助規範意識が低下する傾向については、規範意識が、高すぎるとそれにとらわれるあまり、行動や発想に柔軟性を欠き、規範意識どおりにできない自己を責める結果にもなりやすいため、年次を追って規範意識がある程度弱まることは好ましい傾向<sup>21)</sup>と考えられている。

### 2) 実習後

援助規範意識が、職業的アイデンティティに与える影響をみてみると、実習前と同様の「自己犠牲規範意識」に加え、「返済規範意識」が高いほど、「看護職の選択と成長への自信」や「看護職観の確立」、「看護職として必要とされることへの自負」や「社会への貢献の志向」という職業的アイデンティティを確立していた。灘<sup>22)</sup>によると、実習は、患者や家族と向かい合いながら対象の反応を感じ取り、援助するといった新しい体験であり、その体験は、専門職に必要な知識、技術だけでなく、援助者としてのあり方や態度面を考えさせ、看護師としての専門性を高めるための土台となると述べている。このように実習体験を終えると「自己犠牲規範意識」や以前援助してくれた人には、親切にすべきであり、その人を傷つけないといった互恵的な規範意識や、人に迷惑をかけた時には、その人に対して償うべきであるといった

補償的な規範意識を含んだ「返済規範意識」<sup>23)</sup>が高いほど、職業的アイデンティティを強く確立していたことが示唆された。一方、職業的アイデンティティが、援助規範意識に与える影響をみると、「社会への貢献の志向」が強いほど、「自己犠牲規範意識」が高くなり、実習後も同様に「社会への貢献の志向」と「自己犠牲規範意識」が相互に影響し合っており、看護職に共通する意識が双方の結果に反映されていたものと推察される。

以上のように、看護学生の職業的アイデンティティの確立が援助規範意識に影響を与えるというよりも、援助規範意識が職業的アイデンティティに強く影響を与えていたことが示唆された。

## V. 結論

看護学生の援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連について、実習前後の特徴を分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 援助規範意識の下位因子は、最も高いのは「弱者救済規範意識」で、最も低いのは「交換規範意識」で、実習前後で得点順位に変化はなく、得点の有意差も認められなかった。
2. 職業的アイデンティティの下位因子は、実習前後共に最も高いのは「社会への貢献の志向」、最も低いのは「看護職として必要とされることへの自負」であった。「看護職観の確立」と「看護職として必要とされることへの自負」は、実習後に有意に高得点を示した。
3. 実習前の職業的アイデンティティは、援助規範意識の「自己犠牲規範意識」によって規定されており、実習後は、「自己犠牲規範意識」に加えて「返済規範意識」も規定要因となっていた。一方、援助規範意識の「弱者救済規範意識」と「交換規範意識」は、職業的アイデンティティを規定していなかった。

## VI. おわりに

本調査は、看護系短大3年生を対象に集団としての特徴を調査したものであるが、対象数が少なく結果を一般化するには限界がある。そのため、今後は、対象数を増やすとともに、実習での体験的学びの違いによる影響等を明らかにしてゆくことや、それらの結果を今後の実習指導に生かして

ゆくことも課題と考える。

## 引用文献

- 1) 箱井英寿・高木 修：援助規範意識の性別、年代および世代間の比較,社会心理学研究, 3(1), 39-47,1987.
- 2) Mayeroff, M.(1971)/田村 真・向野宣之訳：ケアの本質—生きることの意味,ゆみる出版, 東京, 1989.
- 3) Erikson, E.H.(1959)/小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子訳：自我同一性,誠信書房, 東京, 1973.
- 4) 岩田浩子・原田唯司：臨床実習が看護学生の職業意識に及ぼす影響,日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 279, 1996.
- 5) 森田敏子他：看護学生の自我同一性に関する研究—職業的同一性形成における因子構造と影響要因,岐阜大学医療技術短期大学部紀要, 3, 1-13, 1997.
- 6) 波多野梗子・小野寺杜紀：看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化,日本看護研究学会雑誌, 16(4), 21-28, 1993.
- 7) 松下由美子：看護学生の職業的同一性形成を規定する要因の検討,教育相談研究, 31, 29-45, 1993.
- 8) 長谷川真美他：看護学生の悩みと援助規範意識に関する一考察,第35回日本看護協会集録(看護教育), 157-159, 2004.
- 9) 岡本佐智子他：看護学生の心理的特徴—修業年限の異なる課程を比較しての分析,埼玉県立大学短期大学部紀要, 6, 25-33, 2004.
- 10) 前掲載1)
- 11) 藤井恭子他：医療系学生における職業的アイデンティティの分析,茨城県立医療大学紀要, 7, 131-142, 2002.
- 12) 箱井英寿：傍観者特性と援助状況、援助経験、援助規範意識が援助行動に与える効果,大阪人間科学大学紀要, 3, 5-10, 2004.
- 13) 前掲12)
- 14) 前掲11)
- 15) 前掲12)
- 16) 前掲8)
- 17) 杉森みどり：看護教育学, 第3版, 241,医学書院, 東京, 1999.

- 18) 鈴木郁生：心理的負担と援助規範意識が向社会的行動に及ぼす影響－短期大学生を対象にした研究－，光星学院八戸短期大学研究紀要，25，101-110，2002.
- 19) 前掲12)
- 20) 前掲11)
- 21) 前掲8)
- 22) 灘 久代：看護学生の臨地実習における行動変化と態度育成，島根県立看護短期大学紀要，9，33-38，2004.
- 23) 前掲1)